

『中国共産党が語れない日中近現代史』

兼原信克・垂秀夫

新潮社／2026年1月／1,166円（税込）

二人の著者は外交官出身、特に垂氏は2020年から2023年まで駐中大使を務め、文字通り日中外交の最前線に身を置いていた人物である。「近代以降の中国の歴史は、日本からの広範な影響を抜きに語ることは考えられない」という立場から、「日本と中国の歴史を、相互影響を与え合った一体のものとして見る」ことに立脚した二人の座談がまとめられている。中国共産党による一方的なプロパガンダによって、いかに数多くの史実が歪められてきたかが主張されている。個々の事例に対する評価については必ずしも全てに賛同できる訳ではないが、新しい視点から見えてくる興味深い事例も多い。

『日本の未来像』 広井良典

岩波書店／2026年3月／1,100円（税込）

従来の「“GDP一元論”的な発想から」経済大国の復活を目指すのではなく、アニミズムという意外な視点を切り口にして、未来の日本社会の在り方が縦横に論じられており、示唆に富む一冊である。

『第二次世界大戦再考』

小関隆・藤原辰史・駒込武・林田敏子・岡田暁生

人文書院／2026年4月／2,200円（税込）

戦争の日常を生きたとはどんな感じだろう。今の日本では戦争は日常ではないが、かつての日本に戦争が日常だった時代はあった。そして、今の世界では戦争の日常を生きている人たちはいる。それは決して他人事ではなく、そうならないためにも過去の経験や歴史を教訓とすべきであり、とりわけあの戦争に学ぶ意義はまだまだあると思われる。なかでもここで薦めるのは、第二次世界大戦の前後を生きた人物に焦点を当てたこの一冊である。第二次世界大戦に関する書籍は山ほどあるが、市井の人びとや戦争と直接関係のない活動をしていた個人の日常から、あの戦争の時代を描くというのは新鮮な切り口だと言えよう。むしろこういった描写の方が、戦争の真相を知らない私たち現代日本の一般人には、意義のある読書体験となるのではないかなと思われる。

『資質・能力を育てる「地理総合」の授業』

由井義通・阪上弘彬

古今書院／2026年2月／3,300円（税込）

2022年度から始まった地理総合の授業は今年度で5年目を迎えた。地理必修化によって生まれた地理総合であるが、その内容の扱い方に苦慮しているという声がいまだに多く聞かれる。地理探究の学びに向けて地理総合では何を、どこまで学べばよいのか、教科書を前にしながらも戸惑う先生も多いであろう。本書は内容のほぼすべてが授業実践で占められている。第1章の地図やGISから第2章の国際理解、第3章の防災まで、全ての単元の授業実践例が1冊で見渡せるのは非常に都合がよい。また、それぞれの実践事例は、各実践で育みたい資質・能力が明確に示されており参考になるのと同時に、その内容を確認すると、地理総合が持続的な社会の担い手を育成するとともに、ウェルビーイングの実現に寄与する学びであることが実感できる。地理総合は、「地理らしさ」が一番発揮できる科目ではないかと実感させてくれる。

『継体天皇』 河内春人

中公新書／2026年5月／1,100円（税込）

かつて日本列島に生きた人々にとって、天皇とはいかなる存在だったのか。古代であれば特に、誰が大王位についたのかが大きな論点だ。4世紀から6世紀の教科書記述は『日本書紀』に大きく依存せざるを得ない。そのため教科書通りの授業展開では、当時当然あったはずの王権をめぐる争いを扱うのが難しい。本書が指摘しているとおり、継体天皇は教科書から消えてしまった。その争いを学ぶには格好の題材であるにもかかわらず、である。当時のヤマト政権には複数の集団が参画しており、継体の集団もその一つだった。継体を大王位へ推戴する過程は教材にふさわしいと、本書を読んで強く感じた。また本書は、この時期の朝鮮半島との関係についても読みやすく仕上げている。紹介者が注目したのは、本書に登場するアヒタだ。信濃の豪族の出でありながら、百済王の臣下として活動していたようだ。こうした人物を授業で取り上げれば、高校生は古代の国際関係や、近代とは異なる古代国家の理解を深められるのではないだろうか。